

る。母親の養育に関する資料も収集できた段階であり、今後、データの検討に入る予定である。

(2) 児童期の社会化過程に関する縦断的研究

これは、名古屋市青少年問題協議会、名古屋市教育委員会による「児童の心身発達の追跡研究」の一貫として行なわれており、児童の社会的行動——達成行動、自立行動、道徳的判断および性役割行動の要因分析に主力を注いでいる。

2. 青年期に関する研究

最近、青年心理研究の展開過程について若干、考察する機会に恵まれた。「青年期へのアプローチの仕方」と題するテーマのもとに、青年心理研究の現状、青年心理研究の方法の現状、さらに、青年心理研究への理論的枠組等を検討した。しかし、この青年心理研究の方法論の実証的検討は、今後の課題としてのこされた。

つきに、青年期の自我にかかわる問題として、われわれは、困った場面における自己開放性について、中学生および大学生を対象に研究を進めている。大学生の自己

開放性についての検討は、青年心理学研究会（代表依田新）編「わが国における青年心理学の発展」に、<sup>註1</sup>「困った場面における自己開放性についての一研究」として蔭山氏と共同で投稿した。また、「困った場面における両親への信頼感と自己開放性についての一研究」を本巻に投稿した。

さいごに、中学生、高校生の社会的態度——保守的、革新的および大衆社会的態度——について、附属中学、高校生を対象に、大学院博士課程速水敏彦と検討中である。この成果は、他日発表の予定である。

なお、上記以外の共同研究として、過疎グループ会員とともに、「いわゆる過疎地域の家族関係」について離村者の追跡調査の資料から、出身地とのつながりや都市での適応状況等の検討を進めている。（1973.12.20）

注1 困った場面における自己開放性についての一研究（蔭山氏と共同）青年心理学研究会（代表依田新）編「わが国における青年心理学の発展」金子書房 1973

課 題 お よ び 現 況 水 野 欽 司

1. 一年は短いもので、雑件に追い廻されているうちに、あっさり過ぎ去ってしまった。従来からのテーマである多次元データの解析法の研究については部分的な検討を進めることができたが、目標にしていたそれらの体系づけのレベルにまでは至らなかった。これらの研究領域は48年9月の日本行動計量学会の発足にみるように、急ピッチで新しい拡張期に入っており、せいぜい中央での動向に遅れないよう努力したいと思っている。

文部省科学研究費総合研究（A）「応用多変量解析の研究」（代表者、統数研林知己夫氏）については、文献研究と一部のプログラム・テストの域に留まり現在その先を目指して検討中である。

2. 学外研究グループとの共同研究としては以下のものがある。これらはいずれも調査を主体とする研究であ

る。

愛知県教育委員会よりの委託研究「学歴評価に関する研究」（代表者、愛教大橋爪貞雄氏）、および名古屋市教育委員会・家庭教育問題専門委員会のプロジェクト「親子の価値観のずれに関する研究」（代表者、名大塩田芳久氏）が、現在、分析作業中である。

中部広告研究会（電通名古屋支社）におけるマーケティング・データの分析技術の研究として、47年度に「耐久消費財による単調順位パターンの作成」（統伸彦と共著、中部広告研究、4号）を報告したが、48年度ではこれを本格的に進めるものとして「調査データの一貫処理システムの設計」なる主題の下で継続中である。

いずれの場合にも、調査データの分析面で新しい試みを取入れることに努力している。

研 究 の 経 過 に つ い て 大 橋 正 夫

1. 対人関係の構造について、これについて私の考え方を発表する機会が与えられた（前巻参照）が、それに対して若干の反響があった。しかし、まだ不十分なものであるので、今後とも考究を続けていく予定である。

2. 印象形成の研究。前年度は、最年度にひきつづき、本紀要に2篇の報告をした。その1は、「パーソナリティの印象形成における情報統合過程の研究」の第3報告である。ここにおいて、従来の線型モデルでは明ら

かにし得ないような、被験者の内的過程を分析する必要を論じ、そのための方法として面接法を採用する試みについて述べた。この方法を取り入れることは、この領域ではまったく新しい試みであり、今後いくつかの問題を解決しながら研究を続ける予定である。もう1篇は「写

真による印象形成の研究」の第2報告で、ここでは用いるべき評定尺度の選定のための資料が分析された。

3. その他、集団課題解決の研究は進んでいない。依頼に応じて雑文を数篇書いたに止まった。この点が特に本年度の心残りである。

## この1年の歩み —昭和48年— 村上英治

1 統教授が急逝されて、すでに1年数ヶ月を経た。敬愛する先学からの影響の大きかったことを、今改めて思う。深くその死を悼みつつ、この年の研究活動は、その先学の遺された研究遺産のあとを嗣ぐことから始められた。研究室の机の上に、手がけられたままに残された図表とメモを手がかりに、中部広告研究会心理測定専門委員会の仲間と共に、そのグループのリーダーとして故統教授が示そうとされた方向性を模索しながら、私たちがなりにまとめあげたのは、48年8月刊行された「中部広告研究」第5巻所載の試論「購買行動タイプの分類に関する試み—16パタンの設定から具体的記述まで—」である。

統有恒選集刊行委員会の手で編集された、金子書房刊「教育心理学の探求」(48年9月)が、命日にあたる9月25日、その霊前に捧げることが出来たのは、私ども教室員全員の、せめてもの故教授への顕彰の気持の具体化であったともいえるが、今1つ、やはりこの先学に励まされて、担当することになっていた、東京大学出版会刊行の「心理学研究法」シリーズ、第12巻「臨床診断」の編輯をどうにか終え、この1月出版の運びに到ったのも、私として何かしら心ほっとさせられる思いである。

2 形式的には「性格心理学及び心理検査法」の講座にこの4月から移ったものの、私自身、今もなお臨床心理学専攻の徒としてのアイデンティティをもつ。日本臨床心理学会そのものは、ここ数年の流れの中で改革委員会の手によって、大きく性格を変えつつあるが、私自身、その新しい胎動と変革の志向性に共感しつつも、私は私なりの歩みをこれからもつづけていきたいと願う。

精神病院における臨床実践の中で、ここ数年関心を抱きつけてきた、精神病者の社会復帰への願いは、昨年までの一連の学会報告及び本紀要19巻所載の論文をひきついで、本年も、より強力なゆきぶりかけを志向しての実践が、48年5月、名古屋大学教養部における東海心理学会第22回大会での口頭発表としてまとめられた。

同じく共通の仲間と共にすすめてきた、精神分裂病者を特に対象としての、ロールシャッハ法にもとづく現象学的接近は、その研究グループにおける数度の、あるい

は合宿しての討論の成果として、仲間のうちの2名によって、一つは渡辺雄三による「ロールシャッハ法への現象学的接近、その序論的報告—ある精神分裂病者の世界と、その自己確立の様態の現存在分析的理解—」として、今一つは、池田博和による「精神分裂病者における《還帰》の人間学的意味方向—ロールシャッハ反応への現象学的接近による—考察—」としてまとめられ、共に牧書店刊「ロールシャッハ研究15巻」(48年度内刊行予定)に収録された。

3 私自身の今一つの大きな関心は、精神薄弱児を中心とする障害児に、いぜん向けられる。

この4月、東海学術奨励金を得ての「重度精神薄弱幼児の集団療育」の実践と、それにもとづく研究は、毎週一回、障害幼児8名を対象とする母子通園形態で、今年度も、一昨年、昨年の実践をふまえてうけつがれた。私自身、今年は積極的に母親に対する集団面接を担当すると共に、臨床心理相談室の仲間と一緒に、障害幼児に対する、毎週実践の都度の「かかわり体験」の記述をつみ重ねてきている。再度にわたる合宿討議を経て、これまた、今年度の終わりには、ここ3年間の研究のまとめを試みることを意図している。

今年で4年目に入った、学部学生のための、教育研究実習の一環としての、コロニー実習は、その都度、現場での実践のきびしさとの対決をとおして、思いを新たにさせられるという点で、私にとって大きな意義を持つ。今夏のとりくみは、「重度精神薄弱児への人間学的接近(第3報)」及び「(第4報)」として、実習参加者全員の集団討議によってまとめられてきた。後者は、今少しの検討を残しているが、前者は、副題を「ある盲精神薄弱者との出会い」として、大学院生、後藤かをりととの共同研究として、本紀要20巻に所載されるところとなる。

数年にわたる、愛知県コロニー、富安芳和らとの共同研究、精神薄弱児の適応行動尺度の日本版標準化は、48年4月、日本文化科学社から、「適応行動尺度の手引—児童用、成人用—」として刊行された。富安、松田を中心にそれらの資料をもとにする統計的分析は、日本特